

住吉御文庫

大阪では 17 世紀から出版・書籍販売業が盛んに行われていた。1723 年に大阪・京都・江戸(現在の東京)の三大都市の出版社が出資して、住吉大社に書庫を建設することになった。この書庫は大阪で一番古い。

これは、長らく住吉が詩歌・文学・芸能の街であったことから、出版社が初版本を寄贈することで、神への敬意を表し、本の出版を成功させることができたのである。また、実用面でのメリットもあった。江戸時代の本は版木を使って印刷されていたおり、刷り重ねると版木は摩耗した。ベストセラーになれば、神社に保管されている無垢の初版本から複製の版木を作ることができる

住吉大社の蔵書は、300 年の間に 5 万冊を超えているが、元の蔵におさまりきらなくなっている。住吉御文庫には、特に江戸時代（1603-1857）後期の人気のある歴史書については、唯一のコピーや最良のコピーが所蔵されていることもある。現在、ほとんどの書籍は近代的な施設に保管されている。関西の出版社から住吉大社に書籍の寄贈が続いている。毎年 5 月になると、保管庫や資料室から本が取り出され、点検や空気入れが行われる。ボランティアがページをめくり、中に潜り込んだ虫を取り除き、紙を天日で乾かす。